

太宰治「カチカチ山」論

——語り手のスタンスを中心に——

はじめに

『お伽草紙』の三番目に置かれた「カチカチ山」は、語り手が物語を語りながらコメントを付ける度合いが比較的高く、また、最初からある意図を持っていることを読者に示しながら語っていく作品である。語り手のスタンス——位置と姿勢——に注目が集まるのは当然で、これまで語りを問題にした論が多くある。たとえば、松本和也は、「カチカチ山」というテクスト内に位置する言表の主体「作者」(「私」)は、複数の仕掛けを重層的に作用させて現実世界の読者との関係の切り結びを演じ、その時、語りかけるテクスト^①という相貌が前景化されていくのだ」と論じ、矢代静一は「弱者で醜悪で女心の機微などまるで分らない役立たずの男の中に、私自身が自己投影されている」、「狸は、デフォルメされた太宰の

申 舌 禾

分身であろう^②」と論じている。また、根岸泰子は、「カチカチ山」は、読者に語り手と作家自身を結びつけさせるという犠牲を払っても、一般的なジェンダー観に即応した結論へと着地することを選んだ^③、「太宰の作品」と述べている。——語り手と太宰治との関わりを論じようとする傾向が見られるのである。

ところで、「カチカチ山」の語り手が最初から持っているある意図とは何か。

もともとこの狸は、何の罪とがも無く、山でのんびり遊んでゐたのを、爺さんに捕へられ、さうして狸汁にされるといふ絶望的な運命に到達し、それでも

何とかして一条の血路を切りひらきたく、もがき苦しむ、窮余の策として婆さんを欺き、九死に一生を得たのである。婆汁なんかをたくらんだのは大いに悪いが、しかし、このごろの絵本のやうに、逃げるついでに婆さんを引掻いて怪我させたくらゐの事は、狸もその時は必死の努力で、謂はば正当防衛のために無我夢中であがいて、意識せずに婆さんに怪我を与へたのかも知れないし、それはそんなに憎むべき罪でも無いやうに思はれる。

語り手は、狸が「婆汁」をたくらんだのなら、兎の執拗ないたぶりを受けるのも理解できないではないが、狸はもともと何の罪もなく、窮余の策として欺いたのだと言う。また、「このごろの絵本」では婆さんに怪我をさせたと言っているが、それも正当防衛であったと狸の行為を正当化しているのである。語り手は「狸さん、可哀想ね。」という娘の言葉には、「思想の根拠が、薄弱であるため、「何も、問題にする価値が無い」と言うが、それを聞いて「或る暗示を与へられ」と言う。おそろく語り手は、娘が「狸さん、可哀想ね。」という言葉が発する前から漠然と狸を可憐に考え、狸の行為を正当防衛だと考えていたのだろうが、娘の言葉から「暗示」を与えられ、狸を「可哀想」な存在として物語を語ってい

くことを思いついたのである。お伽噺では狸は悪者とされているが、語り手はそれを否定して語ろうとするのである。とすれば、まず「カチカチ山」の語り手はどのようにして、狸に味方し、その行為を正当化していくか、その姿勢を明らかにしていく必要があるだろう。

一 兎の人物設定による悲劇

まず、太宰の「カチカチ山」では狸が婆さんに対して何をしたことになっていくかを確認しておきたい。「このごろの絵本」では、引掻いて怪我をさせたことになっているというが、この小説では、狸が婆さんを「えい」とばかりにやつつけて逃げて来」となっている。「えい、とばかりにやつつけ」というのは、どういう意味なのかは判然としないが、それ以後、婆さんについて一言の言及もない点や、兎の「あのお爺さんは、いまごろはきつとひどく落胆して、山に柴刈りに行く気力も何も無くなつてゐるでせうから」という発言から見ると、この小説では、狸は婆さんを殺していると読み取れることもできよう。だとすると、狸は兎に復讐され、殺されても仕方がないと思われるかもしれない。

狸が爺さんから逃れて来た事情を聞いた時、兎は「あのお家の庭先に私が時々あそびに行つて、さうして、おいしいやはらかな豆なんかごちそうになつたのを、あな

ただつて知つてたぢやないの。それなのに、知らなかつたなんて嘘ついて、ひどいわ。あなたは、私の敵よ。」
と言う。語り手が「兎にはもうこの時すでに、狸に対して或る種の復讐を加へてやらうといふ心が動いてゐる」と言うところを見ると、兎は狸の行為に対して「復讐」しようとしているとも読めそうだが、しかし、「復讐」は本当の動機ではない。たしかに狸が兎に殺される悲劇の発端は狸が婆さんを「やつつけ」たことにあるのだが、しかし、真の理由は、兎の狸に対する嫌悪なのである。婆さんをやつつけた狸を非難した後、兎は次のように語る。

傍へ寄つて来ちや駄目だつて言つたら。くさいぢやないの。もつとあつちへ離れてよ。あなたは、とかけを食べたんだつてね。私は聞いたわよ。それから、ああ可笑しい、ウンコも食べたんだつてね。

これは婆さんをやつつけた狸の行為に対する非難ではなく、単に狸に対する嫌悪の言葉である。

また、狸のやけどした背中に唐辛子の葉を塗った後、狸が快復し兎の家を訪問した時の兎の反応は次のようである。

「あら！」と兎は言ひ、ひどく露骨にいやな顔をした。なあんだ、あなたなの？　といふ氣持、いや、それよりもひどい。なんだつてまたやつて来たの、図々しいぢやないの、といふ氣持、いや、それよりもなほひどい。ああ、たまらない！　厄病神が来た！　といふ氣持、いや、それよりも、もつとひどい。きたない！　くさい！　死んぢまへ！　といふやうな極度の嫌悪が、その時の兎の顔にありありと見えてゐるのに、しかし、とかく招かれざる客といふものは、その訪問先の主人の、こんな憎悪感に氣附く事はなはだ疎いものである。

狸の背中を焼き、唐辛子の葉を塗った兎は、狸が地獄の苦しみを味わったのを見たにもかかわらず、やり過ぎたと思つたり、同情したりせず、むしろ、狸に対する嫌悪をますます強くしていくのである。ここに至ると、兎は最初から狸の罪にそれ相当の罰を与えるためではなく、その事件を発端に、最初から抱いていた狸に対する嫌悪が膨らんでいったために、狸を殺すに至ったということが判明する。つまり、狸の悲劇は、婆さんをやつつけたことへの「復讐」ではなく、実は兎の狸に対する嫌悪から生まれたものだと言える。

ところで、このような激しい嫌悪はどこから生まれたのか。それは兎の性格から生まれたのである。語り手は兎が武士道に相応しくない、正々堂々ではない仇討ちの仕方をするところから、兎を十六歳で、処女神のアルテミスに擬えている。

この兎は男ぢやないんだ。それは、たしかだ。この兎は十六歳の処女だ。いまだ何も、色気は無いが、しかし、美人だ。さうして、人間のうちで最も残酷なのは、えてして、このたちの女性である。ギリシヤ神話には美しい女神がたくさん出て来るが、その中でも、ヴィナスを除いては、アルテミスといふ処女神が最も魅力ある女神とせられてゐるやうだ。

アルテミスは「氣にいらぬ者には平気で残酷な事をする」、「水浴の姿をちらと見ただけでも、そんなに怒る」とあるように、些細なことに対しても残酷な仕返しをいとわない「悪」の人物である。これに対し狸は「アルテミス型の少女に惚れる男のごたぶんにもれず、狸仲間でも風采あがらず、ただ団々として、愚鈍大食の野暮天」に設定されている。語り手が「こんな女に惚れたら、男は惨憺たる大恥辱を受けるにきまつてゐる」と言うように、兎と狸をこのように設定した時点で狸の悲劇はす

に必然のものとなっているのである。

語り手は、「兎が、このアルテミス型の少女だつたと規定すると、あの狸が婆汁か引掻き傷かいづれの罪を犯した場合でも、その懲罰が、へんに意地くね悪く、さうして「男らしく」ないのが当然だと、溜息と共に首肯せられなければならないわけである」と言うが、とすれば、この小説では、狸を「可哀想」な存在として描くために、兎にアルテミス型という人物を設定したと思われる。語り手は兎を「無慈悲」で「悪」と設定することで、因果応報の物語から離れ、狸の悲劇を語る物語に移行させたのである。

二 狸の自意識

兎は「悪」の人物として設定され、それが狸の悲劇を起す原因になっているのだが、では、狸の人物設定はどうだろうか。語り手は最後に「無慈悲」な兎と、「善良」な狸と語っている。物語は、兎が十六歳の明敏な美女として描かれているのに反して、狸は三十七歳の愚鈍な醜男として語られ始めるが、実はこの対比は、語り手の言う「無慈悲」な兎と「善良」な狸との対比に正確に対応している訳ではない。ここで、語り手が言う狸の「善良」の意味を探ってみよう。

狸は婆さんをやつつけて逃げた後、兎の「あなたは、

私の敵よ。」という冷たい言葉に対して許しを求める。兎はある悪計を考え、狸に爺さんのために柴刈りに行くなら許してあげると言う。狸は「おれは、もう、どんなに嬉しいか、いつそ、男泣きに泣いてみたいくらいだ。」と鼻をすすり、嘘泣きをする。兎は狸の乱暴な柴刈りを見ても見ぬ振りをし、柴刈りだけを続けている。その場面の狸は次のように描かれる。

狸は兎にけふはひどく寛大に扱はれるので、ただもうほくほくして、たうとうやつこさんも、おれのさかなな柴刈姿には惚れ直したかな？ おれの、この、男らしさには、まるらぬ女もあるまいて、ああ、食べた、眠くなつた、どれ一眠り、などと全く気をゆるしてわがままいっぱいに振舞ひ、ぐうぐう大軒を掻いて寝てしまった。

狸は兎に許しを求めて嘘泣きをしたが、兎が寛大に自分を扱うとそれをいいことに調子に乗って、図々しい態度を見せる。しかし、下山をする時、兎が「やつぱり、男のひとつで、こんな時にはたのもしいものねえ。」と言うと、狸はさすがにずっと調子に乗ることはできず、「けふはお前、ばかにしをらしいぢやないか。気味がわるいくらゐだぜ。まさか、おれをこれから爺さんのとこ

ろに連れて行つて、狸汁にするわけぢやあるまいな。あははは。」と、兎のことを疑うのである。この場面では、狸は兎の態度によって自分の行動を変える一方、純粋に兎の態度を信じることはできず、疑ったりもする。しかし、結局「あら、そんなにへんに疑ふなら、もういいわよ。私がひとりで行くわよ。」という兎の冷たい言葉に、また「いや、そんなわけぢやない。」と謝って兎のことを信じてしまう。疑いと信じたい気持ちの間で葛藤する狸の様子がよく見られる場面である。

もう一つ、狸が兎に背中を焼かれたあと、家にこもりながら、奇妙な自惚れとコンプレックスを語る場面を見てみよう。

ああ、くるしい。いよいよ、おれも死ぬかも知れねえ。思へば、おれほど不仕合せな男は無い。なまなかに男振りが少し佳く生れて来たばかりに、女どもが、かへつて遠慮しておれに近寄らない。いつたいに、どうも、上品に見える男は損だ。おれを女ざらひかと思つてゐるのかも知れねえ。なあに、おれだつて決して聖人ぢやない。女は好きさ。それなのに、女はおれを高邁な理想主義者だと思つてゐるらしく、なかなか誘惑してくれない。

ここでは狸は自分の男振りがいいことに自信を持っているように見える。しかし、兎が唐辛子の葉を持って来た時、「やけど」よりも「色黒」⁽⁴⁾という言葉に惹かれ、その葉を顔に塗ろうとする。そして狸に気づかれなために遮る兎に対し、狸は「お前にはおれの気持がわからないんだ。おれはこの色黒のため生れて三十何年間、どのやうに味気ない思ひをして来たかわからない。放せ。手を放せ。」と、自分の容貌のコンプレックスを語る。

結局唐辛子の葉を塗ってしまった狸は「おれは生れて三十何年間、色が黒いばかりに、女にいちども、もてやしなかつたんだ。それから、おれは、食欲が、ああ、そのために、おれはどんなにきまりの悪い思ひをして来たか。誰も知りやしないのだ。おれは孤独だ。おれは善人だ。眼鼻立ちは悪くないと思ふんだ。」と言って、失神する。この場面からは、狸が自惚れとコンプレックスとの間で葛藤して来た様子が見てとれる。

このような場面を見ると、兎の嫌悪が理解できないこともないほど、狸の態度は「善」とは言いがたい。少なくとも「悪」の兎と明確に対比する「善」とは言えない。もう一箇所、兎が狸に鮒と一緒に捕りに行くため、舟と一緒に作ることを提案した時の場面を見てみよう。

「すまねえなあ。おれはもう、泣くぜ。泣かしてく

れ。おれはどうしてこんなに涙もろいか。」と言つて嘘泣きをしながら、「ついでにお前ひとり、その岩乗ないい舟を作つてくれないか。な、たのむよ。」と抜からず横着な申し出をして、「おれは恩に着るぜ。お前がそのおれの岩乗な舟を作つてくれる間に、おれは、ちよつとお弁当をこさへよう。おれはきつと立派な炊事係りになれるだらうと思ふんだ。

この場面でも、柴刈りの時に見られた狸の凶々しさがよく表れている。また、既に狸の兎の家の訪問に対して語り手は「どんな親しい身内の家にも、矢鱈に訪問などすべきものではないかも知れない。作者のこの忠告を疑ふ者は、狸を見よ。狸はいま明らかに、このおそるべき錯誤を犯してゐるのだ。」と非難さえしていた。兎に少しでも甘い顔をされるとすぐに凶々しくなる狸は、一般的な基準からして「善」とは言えないであろう。それにもかかわらず、語り手が狸を「善良」と言い、狸の味方になってしまふ理由は一体何なのか。鶴谷憲三は「自分の愛した人間の言を死の間際まで疑おうとしない無邪気さから怠惰、魯鈍、劣等感に至るまで、狸には人間の持つあらゆる性質がうかがえると云つても過言ではない」、「この狸の姿をこそ「善良」とみ、「親愛」の情を

太宰は寄せるのである」と述べている。⁽⁵⁾しかし、狸に「人間の持つあらゆる性質」が見えるとはいい過ぎである。また、狸が「自分の愛した人間の言を死の間際まで疑おうとしない無邪気さ」を持っていたと言うのも妥当ではない。先述したように、狸は兎の行動について疑うことがあったし、兎がカチカチ山という名前を教えた時「へんな名前だ。嘘ぢやないか？」と疑っている。ただ、単純に「善良」とは言えない狸に対し、語り手が「親愛」の情を寄せているのはたしかである。その本当の理由は、兎が狸に殺意を抱いてからの語り手の言葉から窺える。

まことに無邪気と悪魔とは紙一重である。苦勞を知らぬわがままな処女の、へどが出るやうな氣障つたらしい姿態に対して、ああ青春は純真だ、なんて言つて垂涎してゐる男たちは、氣をつけるがよい。その人たちの所謂「青春の純真」とかいふものは、しばしばこの兎の例に於けるが如く、その胸中に殺意と陶酔が隣合せて住んでゐても平然たる、何が何やらわからぬ官能のごちやまぜの乱舞である。危険この上ないビールの泡だ。(略)低能でなければ悪魔である。いや、悪魔といふものは元来、低能なのかも知れない。小柄でほつそりして手足が華奢で、かの

月の女神アルテミスにも比較せられた十六歳の処女の兎も、ここに於いて一挙に頗る興味索然たるつまらぬものになつてしまつた。低能かい。それぢやあ仕様が無いねえ。

ここで、語り手は今まで怜悯と書かれていた兎の性質を反転させ、「愚劣な犯罪」を犯す悪魔ではなく、「低能」だと決めつけている。結局狸の悲劇はこのやうな兎の「純真」に原因があつたのである。狸は、この「青春の純真」の兎とはっきり対比される人物なのであり、「世の中には、一口で言へない事が多いよ。」という狸の言葉は半分冗談にせよ、三十七年間、いろいろな苦い経験をし、様々な葛藤を持って生きてきた人物であると言える。このやうな狸は少なくとも兎よりは自意識を持っていると言えらう。しかし、狸の自意識は兎に「惚れる」ことにより、無力化されてしまふのである。実は狸は最初から愚鈍な人物ではなく、語り手が「惚れたが悪いか」と言っているやうに「惚れた」ため、思考が鈍くなつたとも言えるのである。狸の不意の訪問に驚いて叫ぶ兎に対し、「おのづから発せられた処女の無邪気な声の如くに思はれ、ぞくぞく嬉しく」思い、また「兎の眉をひそめた表情をも、これは自分の先日のポウポウ山の災難に、心を痛めてゐるのに違ひ無い」と錯覚するの

は「惚れた」ためなのである。

要するに、兎は自分の感情に何の揺れもなく、狸を殺すという目標だけを考えそれを遂げて行く単純な存在であるのに対し、狸は状況によって時々刻々考えが変わり、「惚れる」ことによって思考が鈍化してしまう「純真ならざる」存在なのである。そしてそのような狸は兎より「人情」を持つ存在とも言えるだろう。つまり、語り手が言う兎と狸の対比は、「無慈悲」と「善良」と言うより、「無慈悲」と「人情」の対比であると言える。このように、兎の「青春の純真」さに批判的な語り手は、それと対比する「純真ならざる」狸を設定し、その味方をするようになるのである。

三 「青春の純真」の意味

太宰治は一九四四年十月一日の「東京新聞」に「純真」という短い文章を発表した。⁽⁶⁾

「純真」なんて概念は、ひよつとしたら、アメリカ生活あたりにそのお手本があつたのかも知れない。たとへば、何々学院の何々女史とでもいつたやうな者が「子供の純真性は尊い」などと甚だあいまい模糊たる事を憂ひ顔で言つて歎息して、それを女史のお弟子の婦人がそのまま信奉して自分の亭主に訴へ

る。亭主はあまく、いいとしをして口髭なんかを生やしてゐながら「うむ、子供の純真性は大事だ」などと騒ぐ。親馬鹿といふものに酷似してゐる。いい図ではない。

日本には「誠」といふ倫理があつても、「純真」なんて概念は無かつた。人が「純真」と銘打つてゐるものの姿を見ると、たいてい演技だ。演技でなければ、阿呆である。家の娘は四歳であるが、ことしの八月に生れた赤子の頭をコツンと殴つたりしてゐる。こんな「純真」のどこが尊いのか。感覚だけの人間は、悪鬼に似てゐる。どうしても倫理の訓練は必要である。

ここには太宰治の「純真」に対する強い批判が見られる。日本にはなかつた「純真」という概念は、「感覚だけ」で「倫理がない」と言うのである。このような言葉を「カチカチ山」の「皮膚感覚が倫理を覆つてゐる状態、これを低能あるいは悪魔といふ」という文章に照らし合わせて見ると、好き嫌いという感覚だけで狸を殺すまでに至る兎の様子が見えて来るのである。

また、この「純真」という概念がアメリカ文化から輸入されたということは、「カチカチ山」の次の文章にも見える。

ひとところ世界中に流行したアメリカ映画、あれには、こんな所謂「純真」な雄や雌がたくさん出て来て、皮膚感をもてあまして擦つたげにちよこまか、バネ仕掛けの如く動きまはつてゐた。別にこじつけるわけではないが、所謂「青春の純真」といふものの元祖は、或いは、アメリカあたりにあつたのではないからうかと思はれるくらゐだ。スキイでランラン、とかいふたぐひである。さうしてその裏で、ひどく愚劣な犯罪を平気で行つてゐる。

このように、語り手は「純真」という概念がアメリカの軽薄な文化に由来するとして、批判している。とすれば、語り手が、日本の昔話の主人公である兎を西洋のキャラクターに設定したのは、アメリカという西洋の文化を批判するための仕掛けだったと言えるのではないか。しかも、「カチカチ山」での「純真」は、ただの「純真」ではなく「青春」の「純真」である。

鷓鴣島の松林は夕陽を浴びて火事のやうだ。こちでちよつと作者は物識り振るが、この島の松林を写生して図案化したのが、煙草の「敷島」の箱に描かれてある、あれだといふ話だ。たしかな人から聞い

たのだから、読者も信じて損は無からう。もつとも、いまはもう「敷島」なんて煙草は無くなつてゐるから、若い読者には何の興味も無い話である。つまり知らない知識を振りまはしたものだ。とかく識つたかぶりは、このやうな馬鹿らしい結果に終る。まあ、生れて三十年以上にもなる読者だけが、ああ、あの松か、と芸者遊びの記憶なんかと一緒にぼんやり思ひ出して、つまらなさうな顔をするくらゐが関の山であらうか。

ここで語り手が、わざわざ「物識り振」って「つまらない知識を振りま」わすのは、三十年年間、生きて来た歳月の思い出や経験を持つ「純真ならざる」自分自身を読者に示し、狸と自分の近似を印象づけようとしているからだろう。人情の機微が分かる三十七歳の狸、そして狸に味方する同年代の語り手、その対極にある人情の機微が分からないアメリカ的な十六歳の兎。この構図が浮かび上がってくるのである。

語り手は「カチカチ山」の主題について「好色の戒め」、「礼儀作法の教科書」、あるいは「道徳の善悪よりも、感覚の好き嫌ひに依つて世の中の人たちはその日常生活に於いて互ひに罵り、または罰し、または賞し、ま

たは服してゐるものだといふ事を暗示してゐる笑話」ではなく、「狸の死ぬるいまはの際の一言にだけ留意して置いたら、いいのではあるまいか。」と述べ、最後に次のように語っている。

曰く、惚れたが悪いか。

古来、世界中の文芸の哀話の主題は、一にここにかかつてゐると言つても過言ではあるまい。女性にはすべて、この無慈悲な兎が一匹住んでゐるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかつてあがいてゐる。作者の、それこそ三何年来の、頗る不振の経歴に徴して見ても、それは明々白々であつた。おそらくは、また、君に於いても。後略。

語り手は最後に兎を「無慈悲」な女性として、狸を「善良」な男性として語り、男女の性格の対比による悲劇として「カチカチ山」の物語をまとめているが、これは既に述べたように不自然なまとめ方である。「カチカチ山」は、語り手が狸に「人情」を持たせ、兎に「青春の純真」という名の残酷さを持たせた物語である。そして、狸に味方する語り手のスタンスの設定には、「青春の純真」である兎が表すアメリカ、或いは西洋の文化に対する作者の批判が潜んでいられると思われる。太宰治は

「作家の手帖」〔文庫〕一九四三年一〇月）の最後の文章で次のようなことを書いてゐる。

夏のお洗濯は、女の仕事のうちで、一ばん楽しいものださうである。あの歌には、意味が無いのだ。ただ、無心にお洗濯をたのしんでゐるのだ。大戦争のまつさいちゆうなのに。

アメリカの女たちは、決してこんなに美しくのんきにしてはゐらないと思ふ。そろそろ、ぶつぶつ不平を言ひ出してゐると思ふ。鼠を見てさへ気絶の真似をする気障な女たちだ。女が、戦争の勝敗の鍵を握つてゐる、といふのは言ひ過ぎであらうか。私は戦争の将来に就いて樂觀してゐる。

作者は非日常の中で日常を守つてゐる日本の女性たちの「美しくのんき」な姿は、アメリカの女性たちにはあり得ないと言ふ。このような作品からも太宰治のアメリカに対する批判が見えるのである。「カチカチ山」は、アメリカの文化を批判する太宰治の考えが潜んでゐる作品だと言へるだろう。

まとめ

狸の悲劇は、語り手が兎をアルテミス型の処女と設定

したことによって、最初から決められていた。語り手は、
怜悯な兎に味方することなく、基本的に愚鈍な狸の味方
として語っている。語り手は、終始単純で、他人の気持
ちや苦痛を理解することのできない「青春の純真」を代
表する兎を批判的に語り、自意識の中で葛藤したり、い
ろいろな感情に悩む「人情」を持つ「純真ならざる」狸
に味方して語っている。この語りのスタンスは、「青春
の純真」に対する批判でもあり、その概念の元であるア
メリカ文化に対する批判でもあると思われる。「カチカ
チ山」は、語り手が最後に言うように、男と女の性差に
よる悲喜劇の物語ではなく、「青春の純真」というアメ
リカ、あるいは西洋の文化に対する批判が潜んでいる物
語だと言えるのである。

【注】

- (1) 松本和也「語りかけるテキスト——太宰治「カチカチ山」」『國文学』、二〇〇八年三月、學燈社。
- (2) 矢代静一「惚れたが悪いか——カチカチ山」『含羞の人——私の太宰治』、一九八六年五月、河出書房。
- (3) 根岸泰子「カチカチ山」論『太宰治研究12』、二〇〇四年六月、和泉書院。
- (4) 狸が色黒に悩む話は原話にはない。太宰がこの話を持ち込んだのは、嘉村磯多の「途上」(昭和七年)の〈私〉

の悩みにヒントを得たのではないかと思われる。「途上」には〈私〉が色黒を気に病むエピソードが出て来る。〈私〉は人間の仕合せは色の白いこと以上にないと思つた」という一節もある。(山下真史氏の教示による。)

(5) 鶴谷憲三『カチカチ山』(太宰治)、『国文学 解釈と鑑賞』、一九八七年一〇月、至文堂。

(6) 菊田義孝「カチカチ山」(『人間脱出——太宰治論』、一九七九年六月、弥生書房)では、太宰治の「純真」を挙げ、「社会の一部に、一さいの道徳を否定して感覚だけを無制限に肯定する思潮が存在するのを覚知し、それがしだいに社会の全般に蔓延することを予感し憂慮して書いたものであろう」と述べている。

(シン ソルフア 本学大学院博士前期課程平成二八年度修了)

